鹿部町地域おこし協力隊通信

地域おこし協力隊　阿部　成史　隊員

●あべ なるひと

宮城県石巻市出身。立命館大学政策科学部在学中に石巻市役所に入庁、東日本大震災からの復興事業に従事。２０１５年、地方創生系ＩＴベンチャー企業に転職。プロジェクトマネジャーとして、北海道から沖縄まで様々な地域の支援を行う。２０１９年、Ａ級グルメ構想に共感し鹿部町に移住、地域おこし協力隊となる。

本当に豊かな生活とは

こういうアメリカンジョークがある。

漁村を訪れた旅行者が地元の漁師にこう聞いた。

「すばらしい魚だね。一日にどれくらい漁をするの？」

「そんなに長い時間じゃない。家族が食べる分だけ、ちょっとだけ漁をするんだ。そのあとは子どもと遊んで、夜になったら友達と酒を飲んで……この繰り返しさ」と漁師。

それを聞いた旅行者はあきれた顔になり、こう言った。

「ハーバード大で経営を学んだ私から真剣なアドバイスだ。君はもっと漁の時間を増やすべきだ。獲った魚は売って、貯金して大きな漁船を買う。そうすれば漁獲高が増え、儲けも増える。そして漁船を二隻、三隻と増やしていく。そのあと自前の加工工場を建てて出荷するんだ。その頃には君は都会のオフィスビルから自分の会社の指揮を取るようになるだろう」

漁師は「それはすごいね。で、それからどうなるの？」と聞いた。

「君は自分の会社を売却して、億万長者になるのさ。あとは悠々自適の人生だ。浜辺にでも家を建てて、毎日昼までゆっくり寝て、子どもと遊んで、夜になったら友達と酒を飲んで楽しく暮らすんだ。どうだい、すばらしいだろう？」

苦労して億万長者になっても、結局元の生活に戻るだけじゃないか――と、このジョークを一笑に付すことはできるが、話はそう単純ではない。

漁師が事業を興し、拡大することで、社会に貢献することができるからだ。

例えば、漁師が漁船団を作り、加工工場を建てることで、そこで働く人たちの雇用を生むことになる。

コロナ禍による営業自粛等によって、「経済を回す」ことが私たちの生活にどれほど実際的にリンクしているのか体感できた人も多いことだろう。

この件の漁師の起業とビジネスの拡大は、より大きく経済を回すことで、従業員をはじめとする自分以外の人々を豊かにし、社会に貢献するという意義があるのだ。

一方で、年収と幸福感は必ずしも比例しないという調査結果も存在する（内閣府、２０１４年）。

正確には、世帯年収１０００万円までは年収と幸福感が比例するが、それ以上は年収を上げても幸福感は変わらない、というものだ。つまり、年収が１０００万円でも１億円でも、その人が感じる幸せは変わらないということである。

これは日本に限らず、海外でも同様の調査結果が出ている。あるポイントまでは物質的な豊かさがリニアに幸福感に直結するが、それ以上は充足してしまう、ということだろう。

家族や友人とゆったりと過ごす冒頭の漁師の生活は、精神的に豊かな暮らしといえる。

幸福とは、物質的な豊かさと精神的な豊かさの両方があってこそ享受できるものなのだ。

鹿部のすばらしい食文化をてこに、高付加価値化や観光・域外交流促進を通し、地域の誇りに繋げる「Ａ級グルメ」は、物質的にも精神的にも鹿部を豊かにする考え方だ。

私にとっては、今年度が地域おこし協力隊としてＡ級グルメ事業に携わる最後の年度となる。これまで以上に尽力していきたい。

現在構想中の企画

「Ａ級グルメランチビュッフェ」と「オンライン料理教室」だ（ともに仮称）。

ランチビュッフェは、鹿部町が参加する「にっぽんＡ級グルメのまち連合」の各町の特産品を使った料理を提供するイベント。どのようなまちと協力して、Ａ級グルメを広げていこうとしているのか、知っていただけたらと思う。

オンライン料理教室は、料理研究家の先生から鹿部の食材を生かした料理を教えてもらう、という催しで、ビデオ通話アプリを使って自宅から気軽に参加できるというもの。

詳細が決まり次第、あらためて周知するので、興味のある方は続報を待たれたい。